

はじめに

外間, 守善

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

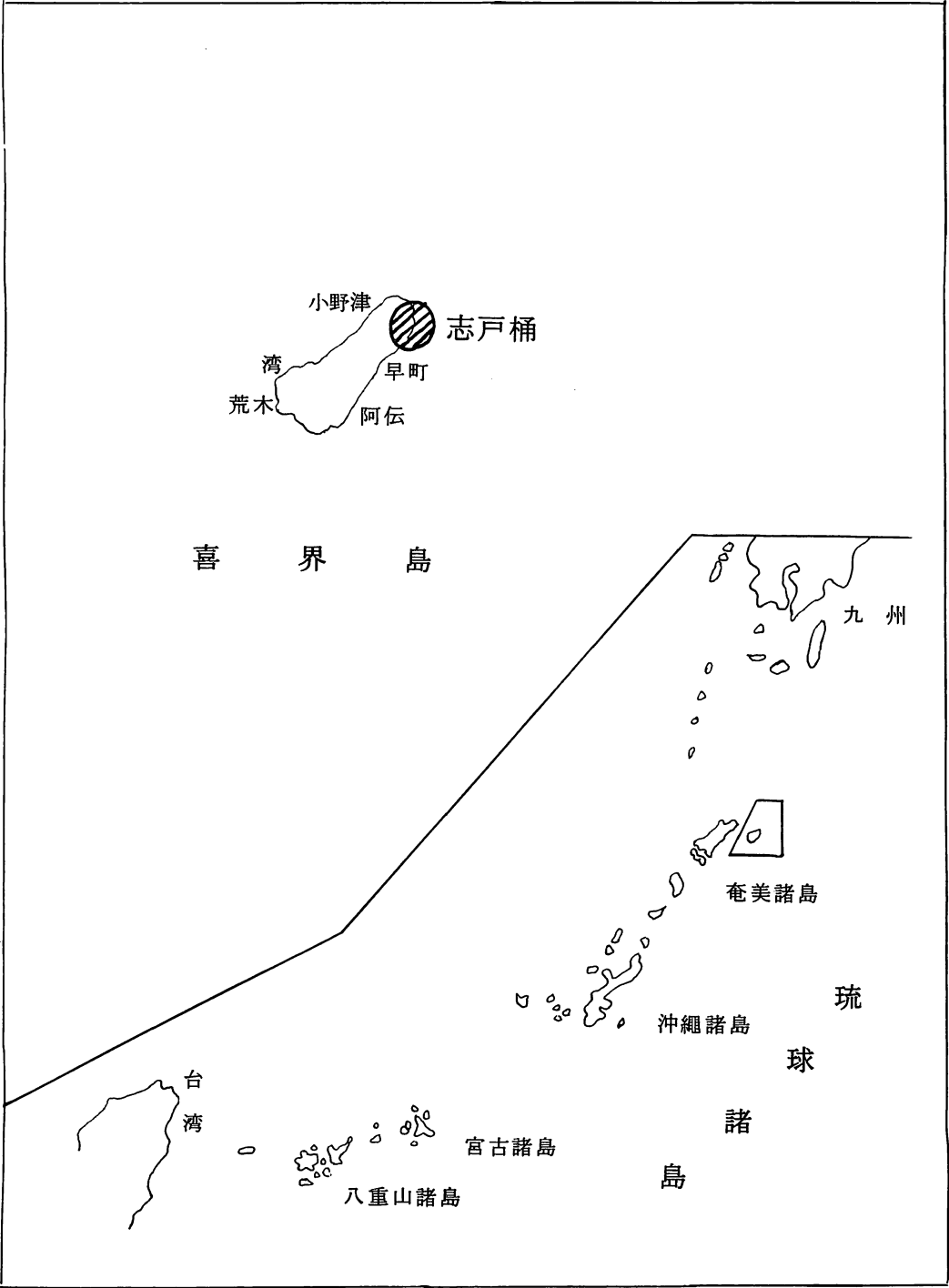
(巻 / Volume)

4

(発行年 / Year)

1978-11-25

奄美大島喜界島志戸桶の地点図



はじめに

琉球方言は日本語の中にあつて本土方言とは異なる諸特徴をもっている言語である。その特異性を生み出した要因として、島嶼という地理的条件をあげることができる。すなわち南海の島嶼には本土におこった時代ごとの言語変動の影響がそのまま伝播していかなかったために、本土における歴史的な言語変化の波からはずれてしまった面をもっている。たとえば、本土では、はやくに失われたハ行 p 音や、室町末期に起こった活用語の連体形と終止形の同化作用という大変動や、係り結び法の消失など、これらは、中央語における歴史的な言語変化の現象としてあげることができるが、この現象は、本土のあらゆる方言をまき込んでいった。ところが琉球方言では本土のように中央語の歴史的な言語変化の波をかぶらずに、これらの古形をいまだにとどめ、あわせて多くの古語もよく保存していて、その特異性をあらわしている。

古い相もさることながら、いま一つは、島嶼という条件によって、琉球方言の内部において新しい個別の言語変化が深化していったためにその特異性をさらに深めていっていることである。無気喉頭化音と有気非喉頭化音との対立、宮古方言の f、v の発生などがそれである。

このように、古い相と新しい相をもつ琉球方言は、奄美、沖縄、宮古、八重山、与那国の諸方言の特徴を生み出し、これらはさらに小方言に分化し、島ごと、集落ごとの方言にまで細分されているのである。これは、あたかも日本語の変化の可能な限りの方向性を示しているかのようでもある。このような小方言を生んだ琉球

方言の諸変化は、本土方言では観察できない多くの言語現象の観察を可能にしてくれる。これらの現象を比較検討することによって、琉球方言の変化過程をあとづけることが可能であり、ひいては日本語の変化過程の全体像をえがくことも可能となるだろう。そのための現存する諸方言の資料を整えることが急がれる。

日本語の一分枝として存在している琉球方言は、いま、試練の時機に直面している。すなわち、交通機関の発達によって島嶼という条件は克服されつつあり、また、マスコミの発達によって琉球方言の特異性も失われつつある。これは、工業化・情報化社会における必然的な趨勢とはいえ、大いなる文化遺産の消失を意味するものであり、文化史的に貴重な資料が失われることになる。

このような状況にあつて、法政大学沖縄文化研究所では、琉球方言の実態をできるだけ広範囲にわたって収集し、少しでも多くの言語資料を後世に残していくことを責務の一つと考えるものである。

琉球方言の資料を収集するにあたって、次のような計画を立てた。

(1) 奄美諸島から与那国島にいたる琉球全域の言語実態を、地理的にも、言語的にも、できるだけ広範囲にわたって記述する。

(2) 調査は、年に一地点に限定し、その地点の言語現象をできるだけ多く記述し、年々その成果を積み重ねていき、ある時期にこれらを集大成する。

(3) 調査では、臨地してその方言を簡略音声記

号で表記収集し、できるだけ分析しない生の言語資料を得るようにする。

(4)調査は、外間守善・屋比久浩・中本正智・内間直仁・野原三義・加治工真市の所員・研究員および任意による参加者が適宜担当する。

(5)一年ごとの調査結果をまとめる。

昭和52年の調査対象地点は、鹿児島県下奄美大島喜界島である。

喜界島は奄美大島の山岳地とは異なり、平坦地が多く、製糖産業が発達している。

喜界島では、繁多忠利町長のお世話をいただき、北部の志戸桶(J i :) 集落を調査することにした。

志戸桶では、大喜慶義区長をはじめ、長老の方々、区民の皆さんにたいへんお世話をいただいた。この調査は大喜慶義区長(46歳)をはじめ次の話者の方々のご協力によるものである。

浜 端 行 仙 氏 (86歳)

南 ス エ 氏 (80歳)

久 山 マ ツ 氏 (78歳)

南 藤 豊 氏 (75歳)

浜 川 泰 夫 氏 (71歳)

孝 野 武 志 氏 (66歳)

重 山 三 四 一 氏 (64歳)

西 野 賀 助 氏 (61歳)

吉 山 マ ツ 氏 (55歳)

稲 崎 一 男 氏 (53歳)

高 木 一 雄 氏 (50歳)

以上の方々は、貴重な志戸桶方言について、お忙しいにもかかわらず、連日教えてくださった。ここに記して、心から厚く御礼を申し上げます。

今回の調査実施およびそのまとめは

語 彙 中 本 正 智

文 法 内 間 直 仁

野 原 三 義

のように分担した。

昭和53年7月

法政大学沖縄文化研究所

所 長 外 間 守 善